

事例1 「教科学習」で 学びに向かう

「進研模試復習イベント」の概要

九州大を中心とした大学生の指導を受けながら、進研模試の復習をする勉強会。模試でつまずいた問題や類題の解法から日頃の学習法、進路に関することまで幅広く質問できる。

実施時期／年間3回、進研模試の答案や帳票が返却される翌月に開催（2010年度は8月、12月、3月を予定）

会場／九州大箱崎キャンパス

対象／「進研模試」を受験した高校1年生

教科／数学・英語

定員／先着200名（事前予約制）

参加費／無料



模試復習のサポートを通して 「自立学習」の定着を促す

自立学習が身に付いてはじめて、生徒は大きく伸びていく。「進研模試復習イベント」を通して、生徒が自信を付け、学びに向かつていく過程を、近畿大学附属福岡高校の例を交えて紹介する。

イベントの流れ

模試復習法ミニ講義

ベネッセコーポレーションの講師が模試の復習の重要性や、効果的な復習のコツなどを講義。

約10分

模試復習TIME（数学・英語）

模試でつまずいた問題や類題に取り組み。会場内にいる九州大などの大学生50名に自由に質問できる。

約2時間

提出課題取り組みTIME

「進研ゼミ」の提出課題をためている生徒がその場で取り組んで提出する（「進研ゼミ」会員限定。会員以外は模試復習を継続）。

約30分

進路&学習法質問TIME

当日に配布する「先輩プロフィール&アドバイスシート」を参考に、希望する大学生に学習法や大学生活・研究内容などについて質問できる。

約30分

『場』『教材』『指導』の 三方向からのアプローチ

大学生講師が「分からない」を「分かるかも」に変える

「一人では集中できない」など、復習したいが十分に出来ていないことを自覚する声が多く聞かれた。

模試は、学習成果を振り返り、弱点を把握するのに適した教材だ。しかし、模試受験後の学習は生徒個々に委ねられるケースがあり、模試を学力向上に生かせるかどうかは、個人差が大きいのが実状だ。

イベントの目的は、単なる復習ではなく、自立学習の定着だ。そのため、『場』『指導』『教材』の三方向からアプローチしている。

ベネッセコーポレーションでは、2008年度より九州大から教室を借り、「進研模試復習イベント」を実施している。イベントに参加した生徒からは、模試活用の課題として「宿題や予習に追われて時間がない」

まず『場』についてだが、イベント会場となる九州大は、九州地区の多くの高校生にとって「憧れ」の地である。参加者へのアンケートでは、「九州大に来てみたかった」という声も多い。このキャンパスの大教室で、他校のライバルたちと机を並べて切磋琢磨することによって受

ける刺激は大きい。将来の大学生活を具体的にイメージし、受験へのモチベーションが高まる効果もある。

次に『指導』だが、会場には50名の大学生講師が巡回しており、生徒に質問があれば挙手して個別指導が受けられる。講師が特に心掛けるのが、高校生の考え方に寄り添った指導だ。事前にグループディスカッションを行い、高校生がつまずきやすい箇所や予想される質問などを検討。当日は、「どの段階で分からなくなったのか」などを丁寧に聞き出し、一緒に考えていくことで、生徒の「分からない」という気持ちを「分かるかもしれない」に変えていく。

三つ目に『教材』についてだが、イベントでは、類題演習が重視される。模試の問題を解き直すだけでなく、応用力や背景知識の獲得へと発展させるためだ。しかし、「何が分からないのが分からない」「分からないことが多すぎる」といった悩みを持つ生徒が、自分で類題を探するのは難しい。逆にいえば、類題を特定する作業そのものが弱点を自覚する力を育て、自立学習に結び付く。そこでイベントでは「進研ゼミ高校

講座」を教材として使い、類題を解くことが効果的な復習になることを体験させていく。

参加者の中で進研ゼミの会員には、進研ゼミ高校講座のどの問題が、模試の各小問の類題であるかを示した冊子が配られる(図1)。また、類題を丁寧な解説と共にまとめた「模試復習サポートBook」が全員に配られる(図2)。

単なる復習に終わらず「自立学習」の定着を促す

更に生徒の自立学習の定着を促すために背景となる知識や、学習への

動機づけを含めた大学生講師ならではの指導が行われる。例えば、数学では解法に加えて、生徒の到達度や課題に応じて、ケアレスミスの防ぎ方や暗記すべき公式などを教える。

英語は解法よりも、日頃の学習法を指導することが多い。長文読解が苦手な場合、生徒と話しながら「長文を読み慣れていない」「文法が弱い」など、弱点を見極めて対策を教える。

イベントの最後には、学習の進め方や進路について質問する時間も設けている。事前に講師の所属大学や学部、お勧め学習法などをまとめた資料が配られ、生徒は希望する講師から自由に話を聴く。「部活の合間

を縫って勉強するには」などの質問に、講師は家庭での自立学習につなげることを意識して答える。

昨年度3月のイベントの事後アンケートでは、「満足した」が99%を占め、「大学生が親切に教えてくれた」(84%)、「教材が分かりやすかった」(48%)、「今まで分からなかった問題が分かるようになった」(45%)と答える生徒が多かった。フリーアンサーで寄せられた「帰宅後、同じような問題に取り組んでみたい」「難問に挑戦する意欲がわいた」といった声は、生徒の中に自立学習へと向かう気持ちの芽生えがあったことを示唆している。

図1 模試復習得Book
「進研ゼミ高校講座」のどこに類題が掲載されているかを示す対応表

大問番号	小問番号	教材名	収録コース	問題番号(小問)とページ
4	A-1	英文法基礎講座 文法(基礎)	P.26	①動詞と動詞 1
	A-2	英文法基礎講座 文法(基礎)	P.53	2 分詞の活用(1) ①(2)
	A-3	英文法基礎講座 文法(基礎)	P.32	7 不定詞 ①(3)
	A-4	英文法基礎講座 文法(基礎)	P.61	3 関係詞 when/where/whenever ①(1)~①(4)
	A-5	英文法基礎講座 文法(基礎)	P.37	5 動詞 have+過去分詞 ①(3)
4	A-6	英文法基礎講座 文法(基礎)	P.39	②動詞 6(2)
	A-7	英文法基礎講座 文法(基礎)	P.25	類 1 (1)
	A-8	英文法基礎講座 文法(基礎)	P.30	類 3 (3)
	B-1	英文法基礎講座 文法(基礎)	P.21	類 2 (2)
	B-2	英文法基礎講座 文法(基礎)	P.9	(3) (5)
	B-3	英文法基礎講座 文法(基礎)	P.46	6 不定詞と動名詞 ①(2)
	B-1	英文法基礎講座 文法(基礎)	P.54	2 分詞の活用(1) ①(2)
	B-2	英文法基礎講座 文法(基礎)	P.20	②動詞 1(3)
	B-3	英文法基礎講座 文法(基礎)	P.56	3 関係詞 when/where/whenever ①(2)~①(5)
	B-3	英文法基礎講座 文法(基礎)	P.20	②動詞 2(1)

図1 模試復習得Book
進研模試の小問に対応する類題が掲載されている教材名とページ

図2 模試復習サポートBook
小問に対応する類題がまとめられた冊子

模試の類題

解答解説

基本 2

問題を読み解くコツがひとりでわかる! (問題解説) 式の展開・因数分解 (置き換え)

模試の流れを解説

高校生のつまずきやすいポイントを踏まえ、独力で解けるように更に丁寧な解説が添えられている

模試復習で上位層・中下位層の 双方の生徒が変化

授業と模試をリンクさせて
学習意欲を高める

近畿大学附属福岡高校が抱える課題は、中下位層の学力の底上げだ。上位層が意欲的に学習に取り組むのに対し、中下位層は学習に自信を持ってない生徒が多く、教師が目を見離せば学力差はすぐに広がる。同校でも、授業を通して生徒の自信を取り戻そ



近畿大学附属福岡高校
3学年担任
飯干正敏
Itohoshi Masatoshi



近畿大学附属福岡高校
数学担当、進路指導部
武田信也
Takeda Shinya



近畿大学附属福岡高校
進路指導部長
石田伸
Ichida Shin

うとしてきた。例えば、数学担当の武田信也先生は、毎授業後、その日の復習問題を宿題に課している。

「ほとんどの生徒が提出しますが、中下位層の生徒は、やらないと叱られるという気持ちも半分といった感じで、必ずしも前向きな姿勢で取り組んではいません。放課後や長期休暇を利用した補習も各教科で頻繁に実施していますが、これらは自ら学ぶ意欲が生徒にあつてこそ、より大きな効果を発揮するものです」

模試復習の指導は、多くの高校同様、教師によって異なる。武田先生の場合、模試直後の授業で問題を解説したり、当日に解答用紙を配布して家で取り組ませたり、記憶が新しいうちの指導を心掛けている。

「答案や帳票が渡される1か月後には問題を忘れており、偏差値だけを見て終わり、という生徒が多い。

しかし模試の直後、『この問題は、授業で学んだことを少し応用しただけだ』と解説すると、『もう少し考えれば分かったのに』『やはり授業は大切だ』と、前向きな気持ちが生まれやすくなります」(武田先生)

授業と模試がリンクしていると感じさせれば、日々の学習意欲も向上する。ただ、クラス全体に対する解説では、中下位層の一人ひとりをフォローするのは困難だ。そのため同校では長期休暇中、模試の基礎問題のみ、全問正解するまで繰り返して取り組ませる補習も行っている。

すべての学力層の生徒が 模試復習で刺激を受ける

同校は、10年3月に実施された進研模試復習イベントに、希望者を参加させた。高校周辺は自然豊かな環境で、おっとりとした生徒が多く、都会の雰囲気慣れさせたいという思いがあった。進路指導部長の石田伸先生はこう説明する。

「センター試験で初めて大学の大教室に入るのでは緊張してしまします。更に県内外の高校生と共に学ぶ

高校と協同開発中

生徒の自立学習を 支援する

「校内学習 サポートプログラム(仮称)」

高校入学までの学習環境の変化により、「難関大志望者であっても独力で学習を進めるのが難しくなっている」など、生徒の自立的な学習力の低下を指摘する声は多い。そのような状況を受けて、09年より一部の高校とベネッセコーポレーションが協同で開発に取り組んでいるのが、課外補習の時間を活用した「校内学習サポートプログラム(仮称)」である。

このプログラムの特徴は、高校との対話から、その高校の課題に合った課外学習プログラムを提供する点にある。進研模試の結果から生徒の学力を分析し、目標となる学力を身に付けるための学習について高校とベネッセが話し合う。そして、難関大合格など、設定した目標に向けて体系的なカリキュラムと教材を設計し、特別補習として生徒に提供する。

ただし、テキストを与えるだけで生徒を学習に向かわせるのは難しい。生徒を動機づけ、学びに向かう手助けを行うコミュニケーション機能が、このプログラムには必要だと考えている。

例えば、ある高校では、生徒自身が学習上の課題に向き合い、自立的な学習者となるためのグループワークを実施した。コーチ役の大学生を交え、苦手科目について生徒同士が「なぜ苦手なのか、どうすれば克服できるか」を話し合い、学習計画を立てていく。生徒は同じ高校生のさまざまな視

ベネッセコーポレーション担当者より

模試復習支援から、日々の学習支援を目指して

高校教育事業ドメイン 九州支社
地域戦略課
河野 巧

進研模試復習イベントは、高校生の自立学習の育成を支援することを目的にスタートしました。「教材」「九州大という場」「大学生からの指導」により、生徒の自立学習支援に一定の効果があることも分かってきました。その一方で、参加できなかった多くの生徒に対する自立学習支援を課題と考えています。この解決には、「場」の拡大が必要ですが、場と人双方の課題が山積しており、現状では実現は困難です。

そこで今後の展望として、模試復習イベントで用いる教材を出来るだけ多くの生徒に提供できる方法を、九州・沖縄地区では検討したいと考えています。更に模試復習だけでなく、日常の家庭学習における自立学習へと支援を拡大させることも考えられます。

一つの可能性としては、「場」に捉われず、弊社情報誌やWEBなどの活用を視野に入れ、大学生と高校生が学びを通して直接コミュニケーションを取れる機会を、日常のちょっとしたタイミングに提供する仕組みづくりが考えられます。今後も先生方をはじめ、多くの方々からご意見をいただけると幸いです。

機会は、生徒にとって良い刺激になると期待しました」

生徒に参加を勧めた飯干正敏先生は、特に下位層の生徒の変化を期待したという。

「下位層には、『頑張らなければ』と焦りを感じながらも、なかなか学習に身が入らずに悩んでいる生徒が少なくありません。年齢が近い大学生から教えられる経験によって何かが変わってくればと考えました」

参加した生徒の動機は、「九州大を見てみたい」「大学生に勉強や学習法を教えてもらいたい」などが目立った。武田先生は生徒の様子を次のように説明する。

「参加を勧めると生徒はすぐに準備を始め、想定した以上にイベント

への参加意欲が高まりました」

イベントでは多くの生徒が大学生に積極的に質問し、漠然としていた進路が具体化するきっかけになったようだ。気持ちの変化に伴い、受験勉強に本腰を入れた生徒も多いという。

「九州大や他校の生徒から刺激を受けて帰ってきたのは期待通りでしたが、それ以上に収穫だったのは、大学生への憧れを口にするようになり、具体的な学習方法にも改善が見られたことです」(武田先生)

今後も授業、そして模試の活用な

どを通じて、全体の学力向上を図る方針だ。

「まずは、一人ひとりに、『やれば出来る』という自信を根付かせるのが先決。そのためには一つひとつの授業を大切にして教師と生徒の信頼関係を強化していく必要がありますし、外部の刺激が有効に働くこともあると考えています」(石田先生)

参加した生徒の反応

- 大学生は年齢が近くて話しやすかった。『先生には、今更、こんなことを聞けないな』ということも遠慮なく質問できた
- 英語が苦手と相談したら、『単語から復習を始めてみては』とアドバイスされた。復習した単語が早速定期テストに出題され、『もっとやってみよう』という気持ちが強まった
- どうすれば計算ミスが減らせるかを質問し、小まめに確認しながら解き進めると良いことを教えられた。今後、心掛けようと思う
- 九州大キャンパスを歩き、九州大生と話して、進路が具体的にイメージできた。夢が近づいたと感じる
- 九州大生の指導がとても分かりやすく、『努力をしてきた人たちなんだな』と感心した



科目	学習内容	学習成果
数学	① 確率・期待値	確率・期待値
	② 図形の幾何学	図形の幾何学
英語	③ 単語・文法	単語・文法
	④ 長文・読解	長文・読解

ワークショップで使用するワークシート例。グループで学習上の課題を話し合い、コーチ役の大学生のヒントなどを基に、自分に合った学習計画を練り上げていく
*実際の生徒の記入を参考に、編集部にて作成

点を学びながら、大学生の体験談を聞き、自分の学習習慣の改善に具体的に取り組むことになる。

今後、学習成果などの検証を行いながら、より課題解決力の高いプログラムを開発していく予定だ。目標に向かって自立的に伸びていく生徒を育てるプログラム。ベネッセコーポレーションは、高校の先生方と協力して作り上げる新しい課外指導の形を、引き続き模索していく。